

# 『古今韻会舉要』の総合的研究-中国近世音韻史の一断面-

著者	花登 正宏
号	81
発行年	1993
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14561">http://hdl.handle.net/10097/14561</a>

はな と まさ ひろ  
花 登 正 宏

学位の種類 博士(文学)  
学位記番号 文 第 81 号  
学位授与年月日 平成5年6月17日  
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 『古今韻会挙要』の総合的研究  
—中国近世音韻史の一断面—

論文審査委員 (主査)  
教授 村上哲見 教授 寺田隆信  
教授 中嶋隆藏

## 論文内容の要旨

### 目次

#### 序章 はじめに

- 0・1 本論文の目的
- 0・2 『古今韻会挙要』研究略史

#### 第一章 『古今韻会挙要』の版本について—— 使用したテキスト ——

#### 第二章 『古今韻会挙要』という韻書について

- 2・1 撰者について
- 2・2 成書年代について
- 2・3 『古今韻会挙要』の体裁
- 2・4 『四声通解』所引の「古今韻会」について
- 2・5 古今韻会と古今韻会挙要

#### 第三章 『古今韻会挙要』の反切の特色について —— とくに反切上字を中心に ——

#### 第四章 『古今韻会挙要』の音韻体系とその特色

- 4・0・1 本章の目的とその研究方法

4・0・2 『古今韻会挙要』と「礼部韻略七音三十六母通攷」・『蒙古字韻』

4・1 『古今韻会挙要』の声母とその特色

4・1・1 「礼部韻略七音三十六母通攷」の声母について

4・1・2 『古今韻会挙要』の声母について

4・2 『古今韻会挙要』における三等重紐諸韻

4・3 『古今韻会挙要』の韻類について

4・4 『古今韻会挙要』の韻母とその特色

4・4・1 「礼部韻略七音三十六母通攷」の韻母について

4・4・2 『古今韻会挙要』の韻母について

第五章 『古今韻会挙要』所引の『説文解字』について ——とくに卷二十五について——

第六章 終章

序章 はじめに

0・1 本論文の目的

本論文は、中国元代に編纂された韻書『古今韻会挙要』を総合的・体系的に理解することを目的として草される。

中国語音韻史は一般に、

(1)上古音 (2)中古音 (3)近世音 (4)現代音 と大きく四つの時期に区分されるが、本論文の研究対象である『挙要』は、(3)近世音の範疇に属する。この時期は、「切韻」(601年)に代表される「中古音」の音韻体系が、声母・韻母の双方について合流、分裂をかさね、最終的に中国現代の諸方言に至る、その中間的時期にあたり、近時多くの研究者の注目するところとなっている。

しかしながら、従来、近世音研究の主要な資料とされてきたのは、元・周德清の手に成る『中原音韻』で、『挙要』についてはそれほど研究者の注目を集めることはなかった。それは、『挙要』が多くの近世音の特徴をもちつつも、

(1)全濁音声母の保存。

(2)重紐の別の保持。

という、所謂「中古音的色彩」を帯びていたためと判断される。そのため、その音韻史上に占める位置も

中古音 → (近古音)『挙要』 → 近世音(『中原音韻』)のごとく、中古音から近世音への過渡的時期に置かれるのが一般であった。ところで『挙要』の成書は1292年、『中原音韻』の方は1324年と、その間の差は僅々30年に満たない。仮に両者が共に当時の実際の語音に基いて編纂されたとするならば、(1)・(2)の所謂「中古音的色彩」は、とても30年やそこで消滅するべきものとは考えられない。

したがって、『挙要』がたしかに宋末元初という、当時の音を記載したものであることが証明さ

れば、『中原音韻』については当時の雅音（共通語）を反映するというのが定説である以上、『挙要』の記載するのはそれとは別系統の雅音とするほかないであろう。つまり、

中古音 → 近世音  $\begin{cases} (a) \text{『中原音韻』系} \\ (b) \text{『挙要』系} \end{cases}$

のように理解されるべきであると考える。

本論文は、『挙要』の音韻体系の解明を通じて、たしかに『挙要』が当時の実際の音に基いて編纂されたものであることを明らかにし、『挙要』の音韻史上における位置について再検討を加えようとするものである。さらに、そのことによって、宋末元初という時代の全般的音韻状況もより明らかとなるであろう。また、『挙要』は音韻学的な資料として重要であるばかりでなく、訓話学・文字学方面でも有用な資料であることを明らかにし、『挙要』を多面的・総合的に検討しようとするものである。

## 0・2 『古今韻会挙要』研究略史

ここでは、『挙要』に対する、本論文に先行する諸研究を、

- (1)旧学的・伝統的立場よりする研究
- (2)1945年までの研究
- (3)1945年以後の研究

の三つの時期に分け、その内容を紹介し論評を加えた。

## 第一章 『古今韻会挙要』の版本について ——使用したテキスト——

『挙要』の版本には、中国で元版・明版・清版の存在するほか、日本刊本に五種、そして朝鮮刊本がある。ここでは、『挙要』版本を検討する上で問題とすべき点を指摘したのち、底本として我が国応永五年（1398）刊の所謂「五山版」を採用したことを述べた。

## 第二章 『古今韻会挙要』という韻書について

### 2・1 撰者について

『挙要』凡例の冒頭に

昭武 黄公紹 直翁 編輯

昭武 熊忠 子中 挙要

とあり、また『挙要』熊忠自序の記載から、黄公紹が「編輯」した「古今韻会」（佚）が余りに大部なので、熊忠がそれを「挙要」して『古今韻会挙要』を作ったということになる。そこで、この二人が『挙要』の編纂に関わった人ということになる。

黄公紹については、その伝記資料の記載から次のようなことが明らかとなった。黄公昭、字は直

翁、福建昭武の人である。南宋の咸淳元年（1265）の進士で、仕えて架閣官に至った。宋が亡んだのち故郷の樵溪の地に隠棲した。学は古今を兼ね、ことに文字の学に造詣が深かったという。著書としては、『在軒集』があり、今に伝わる。

熊忠については伝記資料がなく、その事蹟についてはほとんど不明である。ただ、『挙要』の熊忠自序より、黄公紹と同じ昭武の人で、黄の家に住宿し、「古今韻会」について黄公紹自身から色々教示される機会があったということを知り得るのみである。

## 2・2 成書年代について

「古今韻会」の成書年代については不明であるが、元の至元二十九年（1292）には未だ完成していなかったことだけが、この書と時代の関わりについて知り得る全てである。

『挙要』は熊忠自序の紀年から、元・成宗の大徳元年（1297）には完成していたことが分る。

## 2・3 『古今韻会挙要』の体裁

収録字は計12,652字である。

『挙要』の韻目の数は107韻である。これは劉淵の「任子新刊礼部韻略」の分韻を襲用したものである。所謂平水韻の分韻にしたがったものであるが、平水韻で一般に見られるのは106韻のもので、107韻の見られるのは、「任子新刊礼部韻略」の佚した今日、『挙要』のみとなってしまった。この点でも貴重である。

字母韻について。

『挙要』は表面的には平水韻107韻の分韻に従うが（表の体系）、中味を精査すると、「字母韻」形式により別の音系をあらわす（裏の体系）。これが当時の実際の語音を記載したと見られるものである。この語音は、「七音」とも「七音韻」とも呼ばれたようであるが、1東韻「攏」字の注中には「中原雅声」の語が見え、当時の共通語音であったと考えられる。この「字母韻」を整理、分析することにより、『挙要』の韻類が明らかとなる。筆者の計算では、平声に69類、上声に61類、去声に59類、入声に29類の字母韻がある（後掲附表参照）。

声類の表示について。

声類は、七音（五音）、つまり角・徵・宮・商・羽・半徵商・半商徵の各音と、清濁の組み合わせで表示される。さきの「字母韻」に対応する声類の新しい表示法である。この「字母韻」による韻類の表示と、七音プラス清濁による声類の表示が当時の「中原雅声」を表現したもので、本論文では両者を合わせて「字母韻形式」と呼んでいる。この字母韻形式で表示される『挙要』の声類は計36ある（後掲附表参照）。

## 2・4 『四声通解』所引の「古今韻会」について

『四声通解』は李氏朝鮮期の高名な中国語学者雀世珍の撰になる韻書で、1517年に成書した。この書物の中には、少なからず「韻会」という名の書物が引かれる。『四声通解』凡例中に、「黄公紹作韻会」とあるところから、ここに引用される「韻会」が黄公紹の「古今韻会」であることは自明であるやに思われるが、『挙要』完成後左程時間の経過しない頃より、『挙要』は「古今韻会」・「韻会」と称せられることがあったので、事はそれ程簡単なものではなくなる。一部の学者の中には、「古今韻会」は亡佚したのではなく、もともと完成しなかったとの立場にたつ人もある位である。「古今韻会」と『挙要』との継承関係いかなの問題を検討するためにも、「古今韻会」の成書の問題は不可避の問題であり、本節では、『四声通解』に引かれる「韻会」の性質を分析することにより、その解明を試みようとしたものである。

『四声通解』所引の「韻会」のうち、字音に関わるもの計279条、うち現行の『挙要』と一致しないもの27条を数える。そのうち18条の不一致は極めて重要なもので、各々について逐一検討した結果、単なる誤記、誤植で片づけられる問題ではないことが明らかとなった。つまり、ここに引かれた「韻会」は熊忠の『挙要』ではなく、黄公紹の「古今韻会」であることが確認されたのである。これにより、「古今韻会」の成書の問題は解決し、『挙要』との間の継承関係について検討する基盤が整ったことになる。

## 2・5 古今韻会と古今韻会挙要について

黄公紹の「古今韻会」を「挙要」（要を挙げる）した（summarize）のが『古今韻会挙要』であるとされるのが通例であるが、ではどのようにして、何を「挙要」したのかについては従来論ぜられたことがなかった。本節は、この問題の解明を中心として、「古今韻会」と『挙韻』の継承関係如何について論じたものである。

まず、『挙韻』に附された序などにより、「古今韻会」が「編帙活論」であるため、それを熊忠が「挙要」し、『古今韻会挙要』を編纂した経緯を明らかにした。

ついで、「要を挙げた」ことの具体的内容の検討に入り、東韻の見母・溪母について、『挙要』と『広韻』の収録字数及び各収録字の注釈の字数との比較を行なった。その結果、『挙要』は収録字は『広韻』より数等少ないが、各字に対する注釈字の数では『広韻』を凌駕することが明白となった。『広韻』に対しては、注の甚だ冗漫であるとの批判が早くより存在しており、その『広韻』より注釈字の数の多い『古今韻会挙要』について、その「挙要」の意を注釈を削除するということに求めるのは見当違いであることを、まず明らかにした。

韻書も辞書的一种である以上、辞書として不可欠の要素として、(1)収録語（韻書では収録字）、(2)配列方法、(3)注釈の三者は欠かすことは出来ない。このうち、(3)以外で増減可能なものは、(1)の収録字しかなく、従って、『古今韻会挙要』の「挙要」の意は、収録字数の削減であると推定した。

そのほか、『挙要』の序や凡例を主たる資料として、「古今韻会」と『挙要』との関係を論じ、最終的に次のような結論を得た。

- (1)「古今韻会」の収録字を減らす。つまり、これが「要を挙げる」である。そして、その基準を「礼部韻略」におく。
- (2)配列方法は「古今韻会」のそれを襲用する。
- (3)注釈については、熊忠の附加した部分のあろうことは否定出来ないが、「古今韻会」の注釈を踏襲した部分と、熊忠の附加した部分を区別することは、今となっては不可能にちかい。しかし、博搜・詳細という点で両者は共通する。

### 第三章 『古今韻会挙要』の反切の特色について——とくに反切上字を中心に——

本章では『挙要』の反切、とくに反切上字を中心に、その特色を明らかにした。

『挙要』の反切は、『集韻』の反切を踏襲するが、中にはその反切を更改したものもある。それを分類すると次のようになる。

I 『集韻』になく、『挙要』において増補されたもの	27例
II 反切上字に異同のあるもの	
A 音韻論的に無意味なもの	83例
B     "          有意味なもの	80例
III 反切下字に異同のあるもの	
A 音韻論的に無意味なもの	83例
B     "          有意味なもの	16例
C 存疑	8例
IV 反切上字・下字ともに異同のあるもの	
A 音韻論的に無意味なもの	19例
B     "          "	7例
C 存疑	

『集韻』の反切総数3,279、そこから『挙要』での増補反切27を減じた3,252が両書に共に存する反切である。その内、異同のあるものが上に示したもので、この中のIIの反切の更改が特に興味深く、『挙要』の音韻体系のもつ特色とも大きく関わるかと考えられるので、本章は、『挙要』の反切の特色を論じたものである。

いま、音韻論に有意味な反切上字の更改、つまりII<sub>B</sub>を検討してみると、

- (1)これらの例のほとんど全てに「旧韻(旧音)某某切」との注記があり、その注記された反の大部分が『集韻』のものであること。

- (2)『挙要』において更改された反切が、極めて独特なものであること。

のような二点の特色が見出され、これらの反切が『挙要』により独自に作成され、『集韻』の反切が更改されたものであることが看取される。

これらを更に詳細に検討してみると、いずれもが、中古音から『挙要』に至る音韻変化の結果、

不適当となってしまった旧い反切を音韻変化の結果生じた新しい音に合致させるべく、新たに作成された反切であることが明らかとなった。

さらに、新たに作成され、『集韻』の反切が更改された反切には、以下のような特色のあることも分かった。

(1) 声母にかたよりのあること。

中古の疑母・影母・匣母、そして娘母に集中している。

(2) 反切上字を統一しようとする傾向が極めて顕著であること。

## 第四章 『古今韻会舉要』の音韻体系とその特色

### 4・0・1 本章の目的とその研究方法

本章は、『挙要』の声類・韻類の特色を明らかにし、それに基づいて、声母・韻母の音価を推定することを目的とする。その過程においては、『中原音韻』との比較も行なう。

『挙要』の声母・韻母の整理分析にあたっては、『挙要』巻首附載の「礼部韻略三十六母通攷」（「字母通攷」）を活用し、さらに『蒙古字韻』のパスパ字対音を参考にして音価を推定する。

### 4・0・2 『古今韻会舉要』と「礼部韻略七音三十六母通攷」・『蒙古字韻』

ここでは、三者の極めて密接な関係にあることを論じた。

### 4・1 『古今韻会舉要』の声母とその特色

#### 4・1・1 「礼部韻略七音三十六母通攷」の声母について

ここでは、『挙要』巻首に附載される「字母通攷」という一種の等韻図の体裁についてまず説明した上で、ここで用いられる三十六の字母が、『挙要』の七音と清濁で表わされる声類と対応関係にあることをまず明らかにした（後掲の声類総表にある、1～36の番号を附した文字が「字母」である。）。

ついで、これら三十六の字母について音韻論的な見地から検討を加えると、非母と敷母、匣母と合母で音韻論的対立のないことが明らかとなった。そこでこれらを一類とした上で、のこり34について音価を推定した。

最後に、「字母通攷」の声母の特色として、以下の四点を指摘した。

(1) 全濁声母が存在する。

(2) 一部の疑母字は、なお〔ŋ〕音のままである。

(3) 舌上音と正齒音は合流している。

(4) 泥母と娘母、影母と幺母、魚母と喻母の相異は、口蓋化しているかどうかにある。



#### 4・1・2 『古今韻会挙要』の声母について

4・1・1で検討した結果得た、「字母通攷」の声母の音価、声母の特色は、そのまま『挙要』の特色としてよいことを確認した。

#### 4・2 『古今韻会挙要』における三等重紐諸韻

『挙要』においては拗音韻が二類に分れる。これは中古の重紐という音韻現象の反映である。重紐は中古音には見られるが、現代諸方言ではほぼ完全に消滅したと言ってよく、また『中原音韻』にもその痕跡はほとんど見られない音韻現象である。しかるに『挙要』がこの重紐の別を字母韻の別という形で区別するため、旧態を存する韻書であるとか、先行する韻書・等韻図を踏襲するものであるとか、様々の批判を受けてきた。『挙要』がその成書年代の近さにもかかわらず、『中原音韻』に先行する「近古音」の位置に置かれるのは、おそらくこの音韻現象を保持することが理由のひとつとして挙げられよう。また、『挙要』の韻類の性格づけを行なうためにも、是非共、『挙要』における三等重紐諸韻の状況を明らかにしておく必要があり、そこで本節が準備された。

中古の三等重紐諸韻の『挙要』における状況を検討してみると、興味深い事実が明らかとなった。それは、中古の重紐韻の全てが、その重紐の別を字母韻の別として区別しているわけではないことである。重紐の別を保持するもの、保持しないものは一見雑然とした状況を呈している。しかし乍ら、視点を「重紐はいかに消失したのか」という点にかえてみると、『挙要』における重紐諸韻の雑然たる状況は、見事なまでに重紐の消失を音声学的に説明する資料となり得ることが明らかとなった。

先行する韻書・等韻図中に同様の状況を示すものがない以上、ここにそれらを踏襲したとの説は今やその存在基盤を失ったとも言え、それとは逆に、『挙要』が現実の語音に基いて編纂された可能性は益々高まったことになる。現実の音に基いたからこそ、当時、重紐の別を保持する韻、別を消失しつつある韻、別を完全に消失してしまった韻が、『挙要』の中に存在するという、重紐消失の過程を解明する上で、得難い資料を残してくれることになったと考えられるのである。

#### 4・3 『古今韻会挙要』の韻類について

ここでは、『挙要』の全字母韻のいわば戸籍調べを行なった。中古のどの韻の、どういう声母の音によって或るひとつの字母韻が形成されているかを知ること、その字母韻（つまり、韻類）の性格を知る上で必要であり、将来、韻母の音価を推定する際にも欠くことの出来ない基礎的研究である。

拗音類の性格を分析すね際、前節の重紐韻の分析が有用であったことは、言うまでもない。

#### 4・4 『古今韻会挙要』の韻母とその特色

##### 4・4・1 「礼部韻略七音三十六母通攷」の韻母について

「字母通攷」には、平声で68、上声で61、去声で59、入声で29の字母韻があり、これらが原則的

に「字母通攷」の韻類の数を表わしていると考えられる。したがって、いま舒声については平声で上去声を代表させるとすると、舒声68類に入声29類で、計97の異なった韻類が原則的に「字母通攷」には存在することになる。

ところで、「字母通攷」の内容（これは『挙要』も同じ）を精査してみると、この一種の等韻図は高度な審音能力を有した人が、自己の聴覚印象に基いて編纂したものと考えられる。そういうわけで、とくに喉音のみで形成される字母韻の中には、同摂で開合・直拗を共通する他の字母韻との間に、音韻論的に対立するpairを持たないものもある。そこで、いま音韻論の見地から、上記舒声68類、入声29類の字母韻を再検討し、舒声54類、入声23類の韻母を得、それに各々音価を推定した。その結果、「字母通攷」韻母の特色として以下のことを指摘できることが明らかとなった。

- (1) 一等韻と二等韻は直音形式に併合する。
- (2) 同摂三等拗音が二類に分かれるものがある。
- (3) 曾梗撮合口の字のほとんどは通撮と合流する。
- (4) 輕唇音字は、同摂の直音字母韻に入る。
- (5) 江撮・宕撮は合流する。
- (6) 陽韻正齒音二等字は合口化の過程にある。
- (7) i 韻（止撮開口齒頭音及び正齒音二等）の成立。
- (8) 蟹撮開口三四等字と合口一三四等字は止撮と合流。
- (9) 止撮合口正齒音二等字は、蟹撮直音合口と合流。
- (10) 果撮三等と仮撮との合流。
- (11) 曾梗撮の合流。
- (12) 入声韻尾-P・-t・-kの別の合流。

#### 4・4・2 『古今韻会挙要』の韻母について

『挙要』の字母韻の数を、「字母通攷」と比較すると、「字母通攷」に存在しない字母韻が二つあり、「字母通攷」にあって『挙要』にない字母韻が一つあることが分る。これらについて再検討し、さきの「字母通攷」の検討で得られた結果に微調整を加えると、舒声で1類を減じた53の韻母、入声では「字母通攷」と同じ23の韻母の存在することが明らかとなった。そして、その各々に音価を附した『挙要』の韻母表が節末に示される。

### 第五章 『古今韻会挙要』所引の『説文解字』について——とくに卷二十五について——

本章は、韻書である『挙要』が音韻字方面での資料価値を有するのは当然であるが、そのほかに文字訓詁学方面、ことに『説文解字』研究の資料として貴重であることを、具体例を挙げて示したものである。

南唐の徐鉉が『説文解字』に対して行った注釈の書は『説文繫伝』として知られるが、この書の

卷25は早くに亡佚した。一方、『挙要』所引の『説文解字』は、未だ卷25が備わった完整した『説文解字』に基いているとの説があった。本章ではその考えに基いて、『説文繫伝』卷25復元の研究を行ったものであるが、たしかに現行の『説文解字』と字解・義解の字句とも一致しないものの少ないことが明らかとなり、この復元した卷25が、『説文繫伝』の亡佚した部分である可能性の高いことが確認された。されと同時に、『説文解字』本文校訂の一資料を提供することにもなった。

## 第六章 終章

本章では、『挙要』の中国音韻史上に占めるべき位置について考察を加えた。

第四章での『挙要』の声母・韻母に対する考察により、『挙要』が近世音的特徴を濃厚に有する韻書であることが明らかとなった。そして、『中原音韻』の音韻体系との比較によって、とくに韻母方面での両者の音系の酷似も明らかとなった。しかし一方では、『挙要』に全濁声母の存在することと、拗音韻に二類存在することは、一部論者の『挙要』観に影響を与えてきたことも事実であった。一部の論者は、これらを以て、旧態を存したもの、先行韻書を踏襲したものとする。しかし、これまでの本論文の各処で述べてきたように、『挙要』は撰者が自己の聴覚印象に基いて編纂したものであることは明らかであり、これら一部の論者の考えが成立し得ないものであることはほぼ疑いない。本章では、各処で折に触れ述べてきた『挙要』編纂の経緯、つまり、撰者が自己の審音能力に依據して当時の語音を観察して編纂したであろうことを示す根拠について集中的に論じ、筆者の『挙要』観をまず明らかにした。

『挙要』が現実の語音に基いたものであることが明らかとなると、その成書年代が1297年、1324年という両書を、中古音→近古音（『挙要』）→近世音（『中原音韻』）のように線状に、時間の経過の中で捉えるのはもはや許されないであろう。全濁声母の清音化、拗音韻の二類存在すること、という所謂「中古音的色彩」は僅々数十年の時代差で消滅すべきものではないからである。これらの「中古音的色彩」は、『中原音韻』の音系と同時にたしかに当時の中国に存在していたのである。宋元時代に強力な言語政策がとられたということは寡聞にして耳にしないが、その時代に単一の雅音（共通語音）しか認めてこなかったことにこそ問題があると考ええる。そこで、『挙要』は、

中古音→近世音  $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 『中原音韻』系} \\ \text{b. 『挙要』系} \end{array} \right.$

のように位置づけられるべきであるというのが、筆者の考えである。

またここでは、『挙要』がどの地方の音を記載したのかという問題にも触れた。これについては、『挙要』の音は北宋の首都汴京（開封）より南宋の行在臨安（杭州）に移植された、一種の雅音であるという、服部四郎氏の説を妥当なものとする。服部氏の説をやや詳細に紹介したのち、筆者においても、この説を補強すべき点をいくつか述べておいた。

## 初 出 誌 一 覧

本論文中には、すでに雑誌等に発表した論文を含んでいる。明らかな誤りを訂正したほか、全体としての統一をはかるため字句に修正を施し、また重複する部分の削除をするなど、手を加えた部分がある。

本論文における章節名と初めて発表したときの論文名、及び掲載誌名を以下に記しておくこととする。

### 第二章第四節

『四声通解』所引の「古今韻会」について

(原名)「四声通解所引古今韻会考」(『東北大学文学部研究年報』第40号, 1991)

### 第二章第五節

古今韻会と古今韻会挙要

(原名)同(『人文研究』第39巻第3分冊 大阪市立大学文学部, 1987)

### 第三章

『古今韻会挙要』の反切の特色について — とくに反切上字を中心に —

(原名)「古今韻会挙要反切考 — とくに反切上字について —」(『東方学』第58輯, 財団法人東方学会, 1979)

#### 4・1・1 「礼部韻略七音三十六母通攷」の声母について

(原名)「《礼部韻略七音三十六母通攷》声母攷」(『伊地智善繼: 辻本春彦両教授退官記念中国語学文学論集』, 東方書店, 1983)

### 第四章第二節

『古今韻会挙要』における三等重紐諸韻

(原名)「古今韻会挙要考 — 古今韻会挙要における三等重紐諸韻 —」(『日本中国学会報』第29集, 日本中国学会, 1977)

### 第四章第三節

『古今韻会挙要』の韻類について

(原名)「古今韻会挙要考 — 韻類について —」(『山形大学記要(人文科学)』第9巻第1号, 1978)

#### 4・4・1

「礼部韻略七音三十六母通攷」の韻母について

(原名)「《礼部韻略七音三十六母通攷》韻母攷」(『音韻学研究』第2輯, 中国音韻学研究会, 北京, 中華書局, 1986)

### 第五章

『古今韻会挙要』所引の『説文解字』について — とくに卷二十五について —

(原名)「古今韻会挙要所引説文解字考——とくに卷二十五について——」(『人文研究』第38巻第4分冊、大阪市立大学文学部、1986)

## 論文審査結果の要旨

中国の字典は、字形によって文字を配列するものが早くからあるが、七世紀初頭に音韻によって配列した字典が現れ、これを韻書と呼ぶ。以後は各時代の韻書によってその時代の音韻体系を知ることができる。『切韻』系の韻書に示される隋唐のころの音を中古音と呼び、元代、十四世紀の初めに成立した『中原音韻』に代表される音を近世音と呼んでいるが、本論文の採り上げる『古今韻会挙要』は、『中原音韻』に僅かに先んじて、十三世紀の末に編纂された韻書である。中古音から近世音への移行期に成ったので、音韻史的に多くの問題を蔵するものとして早くから注目されてはいたが、三十巻という大部なもので、しかも内容が複雑なために、従来の研究はいずれもその特色などを部分的に指摘するにとどまっていた。本論文は、この韻書をさまざまな角度から分析して綿密な考察を加え、声類・韻類を整理したのち、すべての声母・韻母の音価を定めて音韻体系の全容を明らかにするとともに、その特色や問題点を論じて中国語音韻史における位置づけを確認している。この韻書は中古音的要素を残しているために、従来はとかく伝統的韻書を踏襲するもののように見られて来たが、本論文では近世初期の現実の語音を反映し、中古音から近世音への移行の過程をそこに窺うことができるとする。その論は十分に説得力があり、中国語音韻史研究の一課題である中古音から近世音への移行の実態の解明に資する所が少なくない。

序章では先ず本論文の意図する所を簡明に述べ、ついでこの書に関する従来の研究を紹介し、批判を加える。すなわち本論文の出発点が明らかに示される。

第一章はテキストの問題。この書は中国のみならず、朝鮮・日本にも版本の種類が多い。論者はそれらを網羅的に調査し、最も早いのは元刊本であるが、現在の元刊本は必ずしも精善ではなく、別の元刊本に拠ったと思われる日本の五山版(応永五年刊)の方がむしろ優れるとし、それを基本テキストとすることを述べる。基礎資料の取扱いに慎重な姿勢が窺われる。

第二章はこの書の概要。撰者、成立年代、内容体裁、『古今韻会』と『古今韻会挙要』との関係などが述べられ、この韻書の輪郭を把握することができる。

第三章は本書における反切(中国独特の標音法、ある文字の音を別の二つの文字で表す)の特色を論ずる。本書の冒頭に反切は先行の韻書『集韻』に従うと明記されているが、論者は綿密な調査の結果、実は『集韻』と異なる部分がかなりあることを確認し、しかもそれが中古音からこの時代に至る間の音韻変化を反映していることを明らかにする。この点は従来全く看過されていたところで、論者の創見にかかるものである。

第四章は本論文の中核を成す部分で、声類・韻類を整理してひとつひとつの声母・韻母の音価を

定め、本書の音韻体系の全容を明らかにする。『中原音韻』の体系と並ぶ、近世初期のもうひとつの音韻体系として、今後の音韻史研究にさまざまな影響を及ぼすことが予想される。中でも本章第二節の重紐に関する論は、本論文の白眉ともいえるべき部分である。重紐すなわち中古音の特色のひとつとされている拗介音の二種の区別がこの書にもみえることは、この書が伝統的韻書を踏襲するとみなす根拠のひとつであったが、論者は本書における重紐の区別が一様でないことに着目し、その実態を精査した結果、きちんと区別されている部分と混乱している部分とがあり、発音の種類と明らかな相関関係があることを確認するとともに、それが重紐の消失過程を示すものであるとする。その論は事実と論理性の双方に支えられて説得力があり、中古音から近世音への移行の問題の解明に有力な手がかりを与えるものと考えられる。

第五章は本書に引かれる『説文解字』について。『説文解字』の基本テキストのひとつ、徐鉉の『説文解字繫伝』、いわゆる小徐本は、巻二十五が早くに失われているが、本書に引かれる『説文解字』の該当部分には、現行のどのテキストとも異なるところがあり、小徐本の引用である可能性が強いとして、そのすべてを示している。小徐本そのものであるかどうか確定はできないものの、少なくとも『説文解字』の異文のひとつとしての資料的価値があることは疑いを容れない。

第六章は結語。特にこの書の中国語音韻史における地位の確認、すなわち伝統的韻書を踏襲するものではなく、現実の、おそらくは臨安（今の杭州）における一種の標準音に拠ったものとしてのその意義が力説される。

以上、本論文は中古音から近世音への移行期に成立した『古今韻会举要』を綿密に分析して音韻体系の全体を再構成するとともに、それが近世初期における現実の語音を反映するものであり、中古音から近世音への移行の過程を示すものであるとする。着実かつ周到な資料の検討と綿密な考察に支えられたその論は極めて説得力があり、その成果は中国語音韻史研究の発展に寄与するところが少なくない。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。